

『伊勢物語』を用いたアクティブ・ラーニングの実践

—平成 27 年度「古典文学」の報告—

道園 達也*

The Practice of Active Learning Using “The tales of Ise”
-A Report of “Classical Literature”-

Tatsuya Michizono*

It is a report of the practice of active learning using “The tales of Ise” in “Classical literature”. Members of a class made material, and reported it based on this material. And they discussed. The characteristic of “The tales of Ise” is that “Uta” asks a story and a story decides meaning of “Uta”, and the stories using “Uta” are arranged. Members of a class made “Uta” and story using “Uta”. And they arranged stories using “Uta”. As survey results we found out that active learning is effective, but correspondence with targets of a subject is insufficient. It is necessary to improve the targets and methods.

キーワード：古典文学、伊勢物語、アクティブ・ラーニング

Keywords : Classical Literature, The Tales of Ise, active learning

1. はじめに

本校が掲げる「熊本高専の学習・教育目標—本校が育成する人材像—」（以下「学習・教育目標」と略記）は次のとおりである。

- (1) 日本語及び英語のコミュニケーション能力を有する技術者
- (2) ICTに関する基本的技術及び工学への応用技術を身に付けた技術者
- (3) 各分野における技術の基礎となる知識と技能及びその分野の専門技術に関する知識と能力を持ち、複眼的な視点から問題を解決する能力を持った技術者
- (4) 知徳体の調和した人間性及び社会性・協調性を身に付けた技術者
- (5) 広い視野と技術のあり方に対する倫理観を身に付けた技術者
- (6) 知的探究心を持ち、主体的、創造的に問題に取り組むことができる技術者

以上、6項目の目標にサブ項目を配置し、それらの達成を目指したカリキュラムを整備している。

また、本校八代キャンパスではカリキュラムの実効性を

高めるために、平成 26 年度に「八代キャンパスの教育改善に関する提言書 『教える』から『学ぶ』への転換」がまとめられた。そこでは、e-Learning、自学自習支援、ICT教育、英語教育、国際化教育などに関する具体的な提言がなされている。そのキーワードのひとつがアクティブ・ラーニングである。アクティブ・ラーニングは近年、教育現場への導入が推進されている⁽¹⁾。また、古典文学に関する実践事例も蓄積されつつある⁽²⁾。

本稿は「古典文学」において『伊勢物語』を用いたアクティブ・ラーニングの実践報告である。「古典文学」は「経済学」「日本現代文学」「哲学」「歴史と文化」「社会と法」とともに「学習・教育目標」(4)「知徳体の調和した人間性及び社会性・協調性を身に付けた技術者」のサブ項目1「広い視野で物事を考えることができる」に対応している。「古典文学」の役割は古典文学を題材に「広い視野で物事を考えることができる」ようにアクティブ・ラーニングの手法を活用することである。「広い視野で物事を考えること」を、どのように把握するかという問題はよりよい教育手法を導入するために改めて検討する必要がある。今回は人間と、その価値観、および言葉の多様性を受容し、自分なりに考えることとしておく。

2. 平成 27 年度「古典文学」の報告

2.1 科目概要

「古典文学」は本科 5 年次前期開講の選択必修、学修単

* 共通教育科（八代キャンパス）
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Liberal studies,
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, 866-8501, Japan

位科目である。1コマ 90分×15回、自学自習を含めて計45時間で2単位。平成27年度の受講生は17名である。以下、シラバスの記載内容を摘記して、「古典文学」の概要を紹介する。

教科書：『伊勢物語』大津有一校注（岩波文庫）

参考書：『伊勢物語全訳注』上下・阿部俊子訳注（講談社学術文庫）、『新版伊勢物語付現代語訳』石田穰二訳注（角川ソフィア文庫）、『伊勢物語』永井和子訳注（笠間文庫）

科目概要：古典文学に表現された人間の知を読み解きたい。人生や社会、自然に対する思想と感性は、共通性と差異によって（いま・ここ）に生きる私たちの姿を照らし出してくれる。今年度は『伊勢物語』を精読することで、その一端に触れたい。

授業方針：『伊勢物語』を精読する。学生は本文と現代語訳、および課題設定と考察の資料を作成、口頭発表を行う。その後、参加者全員によるディスカッションを行う。古文への抵抗感をやわらげ、その世界が身近に感じられるように配慮したい。

平成27年度は『伊勢物語』を取り上げた。自学自習時間の確保と確認を意図して、学生に資料の作成と口頭発表を課した。資料には担当する章段の現代語訳を載せるようにしたが、「古文への抵抗感をやわらげ」るために、古語辞典を引いて訳すのではなく、上記参考書の現代語訳を参照・活用してよいこととした。本キャンパスでは1、2年次の必修科目「国語」において検定教科書を用いて古文を学習する機会を設けている。しかしながら、助動詞を含めた古典文法の習得や古語の学習が不十分であるため、参考書を活用して現代語訳することとし、「古文への抵抗感」を軽減したいと考えたためである。

達成目標：

- I. 歴史的仮名遣いの古文を音読できる。
- II. 参考書を活用し、古典文法の基礎を踏まえ、古文を現代語訳できる。
- III. 自ら課題を設定し、自分なりに考察できる。
- IV. 提示された論点を整理し、ディスカッションできる。
- V. 課題に対して、主体的に取り組むことができる。

評価方法及び総合評価：定期試験60%、発表20%、課題20%で算出された点数が60点以上であること、また、課題が8割以上提出されていること。以上、2つの条件を満たすことで合格とする。期末において、以上の条件を満たさない場合は、再試験等を実施することもある。

科目概要と授業方針に基づき、達成目標を5つ設定した。達成目標I、II、III、IVは発表と課題に対応し、達成目標Vは課題の8割以上の提出を求めたことに対応している。定期試験は中間と期末と2回実施し、主に達成目標IVの提示された論点の整理に対応している。

表1 平成27年度「古典文学」スケジュール

前期	木・1	内容
1回	4/9	文学史の「伊勢物語」（道園） 担当決め
2回	4/16	一（道園）
3回	4/23	二・三（A）四（B） 五（C）六（D）
4回	4/30	七・八（E）九（F） 十・十一（G）十二・十三（H）
5回	5/14	十四・十五（I）十六（J） 十七・十八（K）十九・二十（L）
6回	5/21	二十一（M）二十二（N） 二十三（O）二十四（P）
7回	5/28	二十五・二十六（Q） 『古今和歌集』と『伊勢物語』（道園）
8回	6/4	中間試験
9回	6/11	試験返却・解説 歌をつくる（全員）
10回	6/18	二十七・二十八・二十九（A） 三十・三十一・三十二（B） 三十三・三十四・三十五（C） 三十六・三十七・三十八（D）
11回	6/25	三十九（E）四十（F） 四十一・四十二（G） 四十三・四十四（H）
12回	7/2	四十五・四十六（I） 四十七・四十八・四十九（J） 五十・五十一・五十二（K） 五十三・五十四・五十五（L）
13回	7/9	五十六・五十七（M）五十八（N） 五十九（O）六十・六十一（P）
14回	7/16	六十二（Q） 歌をつくり、物語をつくる（全員）
15回	7/23	物語を配列し、歌物語をつくる（全員）
16回	7/28	期末試験
17回	8/6	試験返却・解説 学生アンケート

2.2 スケジュール

平成27年度「古典文学」のスケジュールを表1に示した。実際には就職活動等に伴う公欠により、予定日とは別の日に発表した受講生もいたが、今回は当初の予定表を掲げた。1列目は授業回数、2列目は日付を示した。3列目は内容の概略を示した。漢数字は教科書の岩波文庫版『伊勢物語』の章段番号、（ ）内のアルファベットは受講生を示している。たとえば、受講生Aは「3回/4/23/二・三」と「10回/6/18/二十七・二十八・二十九」を担当したことを示す。

1回目は「文学史の『伊勢物語』」と題して授業担当者（道園、以下同じ）が解説した。配付資料に引用したのは以下

の文献である。

井筒雅風・樺島忠夫・中西進共編『21 新国語総合ガイド』二訂版（京都書房、2009・1）

室伏信助「物語（源氏物語以前）」（木村正中編『中古日本文学史』有斐閣、1979・11／1997・12、14刷）

加藤周一『日本文学史序説』下（筑摩書房、1975・2／1992・4、24刷）

授業担当者の解説の後、くじ引きで受講生が担当する章段を決めた。

2回目は授業担当者が発表資料（例）を作成し、資料作成や口頭発表の注意点を説明した。発表資料は授業方針に示したとおり「本文」（底本は岩波文庫）、「現代語訳」、「課題設定と考察」、および参考文献で作成した。資料は Webclass で発表の2日前までの提出を指示した。

3回目から7回目、および10回目から14回目は各担当者が作成した資料に基づき、口頭発表を行い、授業担当者がコメントした。ディスカッションは4名の発表者それぞれに3～4名を、くじ引きで割り振って行った。ディスカッション終了後は発表者に議論の内容を簡単に報告してもらった。1コマ90分の内訳は口頭発表とコメントが1人あたり10～15分程度、ディスカッション10分程度、報告が10分程度であった。

授業担当者によるコメントは、音読の誤り、本文引用の不備の指摘や課題設定と考察の不明瞭な点の確認が多かった。

7回目の『古今和歌集』と『伊勢物語』は中間試験後の2巡目への展開と、アクティブ・ラーニングへの接続を意識して授業担当者が行った解説である。『古今和歌集』に業平作として収載された歌と、その歌を用いた『伊勢物語』二、四、五、九、十七、十九、二十五の各段を比較する資料を作成・配付して歌物語の特質を検討し、「歌が物語を求め、物語が歌の意味を定める」という点について解説した。

8回目と16回目は本校八代キャンパスの学事日程に合わせて定期試験を実施した。定期試験は記述式とした。授業担当者による解説、および受講生の発表とディスカッションの論点を踏まえて以下の設問とし、教科書と発表資料の持込可とした。

中間試験の設問は次のとおりである。

- 一、『伊勢物語』は「みやび」（優雅なふるまい）の精神を基調とした物語、また「愛とみやびの物語」とされる。『伊勢物語』における「みやび」とは、どのような「ふるまい」だと思うか、今回の範囲（一段～二十六段）内の段に触れつつ、あなたの意見を述べよ。
- 二、今回の範囲内で、「をとこ」の歌の中から優れていると思う歌を一首選び、選択理由を説明せよ。
- 三、今回の範囲内で、隣り合う二つの段を任意に選び、その関係について、あなたの意見を述べよ。
- 四、『古今和歌集』の在原業平の歌を用いた『伊勢物語』の各段（二、四、五、九、十七、十九、二十五）から一つの段を選んで、両者の比較によって明らかとなる

『伊勢物語』の特質について説明せよ。

中間試験の設問一は1回目、設問四は7回目の説明内容を踏まえたもの、設問二と設問三は受講生の発表とディスカッションにおいて言及された論点から出題したものである。配点は各25点とした。

期末試験の設問は次のとおりである。

- 一、今回の範囲（二十七段～六十二段）内には、極端に短く、断片的と言ふべき段が含まれる（五十一～五十七段など）。それらの段は、どのような表現効果を有していると思うか、意見を述べよ。
- 二、『伊勢物語』の魅力は「歌が物語を求め、物語が歌の意味を定める」ところにあるとした場合、次に問題となるのは、そのようにして生まれた複数の段を、どのように配列するかということである。配列するという表現行為の面白さや難しさについて、意見を述べよ。
- 三、隣り合っていない複数の段に取り上げられているモチーフ（色好みの女、蛍、贈り物としての衣服など）のうち、一つを選び、その描かれ方について、意見を述べよ。

期末試験の設問一と三は受講生の発表とディスカッションにおいて言及された論点から出題したもので、設問二は次に紹介するアクティブ・ラーニングの内容を踏まえたものである。配点は設問一と二が30点、設問三が40点である。設問三は出題を予告し、事前に『伊勢物語』を読み返し、準備しておくよう指示した。章段の内容を踏まえた組み換えの作業が必要であり、難易度が高いと判断したためである。

記述式の評価基準は、設問との対応、文のねじれ・誤字脱字の有無である。中間試験は最高点95点、最低点67点、平均86.5点、期末試験は最高点98点、最低点67点、平均86.1点の結果であった。

総合評価は定期試験の点数を60%に換算し、発表20%と課題20%を合算した。発表および課題には全受講生が十分に取り組んでくれたので差はつけなかった。受講生数が17名と少人数であったことも有意義であったと考えられるが、一人一人の受講生の意欲的な参加を同様に評価したためである。その点については、17回目の授業で説明した。

2.3 アクティブ・ラーニングの実践

学生による資料作成、口頭発表、ディスカッションもアクティブ・ラーニングである。それに加えて、今回工夫したのは前記スケジュールのうち、9回目「短歌をつくる」と、14回目「歌をつくり、物語をつくる」、および15回目「物語を配列し、歌物語をつくる」の取り組みである。

9回目の「歌をつくる」では中間試験の答案返却と解説の後、受講生に短歌をつくってもらった。

- 1) それぞれ1首ずつ作り、短冊に書く（無記名）。
- 2) 授業担当者が回収し、短冊に通し番号を振る。
- 3) 受講生は手元の用紙に通し番号を記入。
- 4) 短冊を回覧し、手元の用紙の該当箇所に転記。
- 5) 良いと思う歌を2首ずつ選び、発表。

6) 授業担当者が集計し、結果を公表。

句会の方式を参考に歌を作成し、その場の秀歌を選ぶという作業である。当日は大雨により公共交通機関が遅延したため3名欠席、また出席者のうち1名はその場で歌をつくることができなかった。歌をつくれた受講生が13名、それに授業担当者の歌1首を加えて14首となった。そのうち得票数が多かったのは次の歌である。()内の数字は得票数である。

- ・夏の雨決まって届くメロンたち
恋しくなるのは祖父の声(7)
- ・点々と雨傘さして花のよう
学校前で閉じていく花(6)
- ・風が吹き揺れる青葉に田の水面
夕暮れ空の色を写して(5)
- ・ぱっとさす傘の中でも雨に濡れ
それでも前に一歩踏み出す(4)
- ・ざーざーと空暗くして降る雨は
テスト返しの私の心(2)
- ・梅雨の時期辺りに響く大合唱
カエル・雨粒・雷の声(2)

その他、得票数1の歌は4首、0の歌は4首であった。

14回目と15回目は連続した取り組みである。14回目は授業担当者が授業を振り返りつつ、『伊勢物語』の特質を「歌が物語を求め、物語が歌の意味を定める」ことと「物語の配列」にあるとした。その上で、以下の取り組みが『伊勢物語』の表現行為を疑似体験し、その特質をよりよく理解するためであることを説明した。

- 1) それぞれ1首ずつ作り、短冊に書く(無記名)。
- 2) 授業担当者が回収し、受講者に引いてもらう(自分の歌を引いた場合は、引き直す)。
- 3) その歌を用いて物語をつくる。

15回目は、それらの物語を資料にまとめ、配付した。授業担当者が感想を交えずに音読した後、それらの物語を、どのように配列するかを考えてもらった。それぞれのアイデアがまとまった頃、くじ引きで3~4人のグループに分かれ、配列の仕方について意見交換した。

そのようにしてつくられた歌と物語は授業担当者にとっても楽しく、おもしろいものばかりであった。本報告では、そのうち、いくつか紹介する。

14回目につくられた歌「地震にも雨や風にも火災にもどれにも強いセキスイハイム」は、つくった本人も冗談半分であったようだし、その歌を引いた学生も当初は物語をつくるのに悩んでいたようである。

①ある所に、ある夫婦がいました。その夫婦には、子供が生まれ、家を買う事にしました。そこで、住宅展示場へ出かけてみましたが、なかなか気に入る物件がありません。あきらめて帰ろうとした時、明るいセールスマンの声が聞こえてきました。

地震にも雨や風にも火災にも
どれにも強いセキスイハイム

夫婦は、子供のために安心できる家が欲しいと思っていたので、セキスイハイムに頼み、家を建ててもらいました。そして、いつまでも幸せに暮らしました。

物語の担当者は歌を生かす物語をうまくつくったと思う。歌をつくれた学生も驚いたようであった。

②7月上旬、ある少年がいた。一生続くかと思われた雨がようやく止み、晴々とした気持ちで登校していた少年だが、あまりの暑さに汗を吹き出しながら、

梅雨明けて傘は閉じられ日が射して
これから雫肌つたいける

とよんだ。なんだか昔の人みたいだなと笑いながら、夏への期待に胸をふくらませ、歩くのだった。

③昔、空想の世界を夢見た、想像力豊かな男がいた。毎日お経のような話をする先生の話の聞きすぎて、ある時、ふと

時間飛べる能力手にした授業中
今日もまた無意識まぶた閉じる

と、心の中で歌を詠み、深い眠りについた。ふと目が覚めると、自分は母に抱き上げられていた。

④梅雨の終わり、ある学生が授業を受けていた。クーラーをつけているが、教室はじめじめしていて気分があがらなかった。そんな中、前期末のテスト日程が発表され、学生は勉強しなくては思い、ゆううつになった。

明日こそ勉強するぞと計画を
立て続けること一週間

学生はきちんと勉強をしたのだろうか。

⑤男がいた。その男、七月初めに離れた女と再会する約束をしていた。その日までに他の女と関係を持たず、女のことだけを思いながら暮らしていた。約束の日になり、女がなかなか来ないので詠んだ歌、

待ちわびた再会の日を迎えたが
雲がかくした星が成す川

結局、女はその日訪れなかった。

②は「ける」の使い方がおかしいが、歌を詠むという行為を「なんだか昔の人みたいだな」とする自意識によって物語として成立している。また、③は「想像力豊かな男」が「深い眠り」から「覚める」と、「母に抱き上げられていた」という結末が「男」の想像力の所産でありつつ、語り手の想像力でもあるという点で魅力的である。また、④のように学生生活や季節感を取り入れたもの、⑤のように『伊勢物語』の書き方を意識して、まとめたものなどもあった。

15回目は、それらの配列に取り組んだ。詳細は省くが、物語の配列は人それぞれであり、まったく同じにはならなかった。

なお、以上の作業すべてに授業担当者も参加した。

3. アンケート調査の結果

以上の取り組みについて、期末試験の答案返却と解説の

日にアンケートを実施した。内容は達成目標に対する自己評価、および『伊勢物語』と授業での取り組みに関する質問である。回答者数は1名欠席のため、16名である。

まず達成目標に対する自己評価結果を表2にまとめた。

1列目は達成目標の番号に対応する。内容は既に紹介しているので表中には省略した。2列目から5列目の最上段の数字は「4」が「十分できた」、「3」が「できた」、「2」が「できなかった」、「1」が「まったくできなかった」である。2段目より下は達成目標毎の回答者数を示した。6列目はその平均である。

目標Ⅰの古文の音読は発表時に指摘する程度で、重点的に練習する時間を設けなかった結果であろう。目標Ⅱの現代語訳は参考書を活用してよいという点が、実際には参考書のうちいずれかの現代語訳をそのまま引用する学生がほとんどだったので、「できる」という自己評価に結びつかなかったものと考えられる。目標ⅢとⅣの考察やディスカッションは『伊勢物語』が題材であり、難しさを感じた学生が多かったようである。そのうち、目標Ⅱ、Ⅲ、Ⅳについては「2」つまり「できなかった」という回答が見られる。改善を要する点である。

目標Ⅴは「十分できた」という自己評価が10名であり、平均も「3.63」と5項目の中でもっとも高い。発表資料を提出しなかったり、うまく話せるかどうかは別にしてディスカッションに参加しなかったりした受講生はいなかった。受講生の良好な取り組みの結果である。

『伊勢物語』に関する質問について表3にまとめた。質問は「『伊勢物語』の魅力は自分なりに理解できましたか」である。結果は「十分できた」が9名、「できた」が7名であり、「できなかった」、「まったくできなかった」の回答者はいなかった。もし受講生それぞれが『伊勢物語』の魅力は自分なりに感じられたとすれば、授業担当者として嬉しい限りである。

次に授業での取り組みに関する質問は「歌を作ったり、その歌を用いて歌物語を作ったりしたことについて感想をお書き下さい」で、自由記述での回答である。そのうち、いくつかを紹介する。用字等は原文のままである。

- ・歌をつくるのはむずかしく、また、その歌を用いて歌物語をつくるのもむずかしかったです。しかししたのしかかったので、またやってみたいと思いました。

このように歌や物語をつくるのは難しいが、楽しかった、面白かったという感想が多い。否定的な意見はなかった。

- ・普段はあまり身近なものではない歌に触れられる良い機会でした。他の人が何を考えているのか、すこしだけのぞけた気がして楽しかったです。
- ・自分の作った歌を読んでもらったとき、自分の思ったのとは違う解釈をした人もいて、1つの歌でも、人それぞれの解釈があるのかと思った。
- ・自分の書いた歌を使って他の人が物語を作ることによって、違った視点から歌がかいしゃくされていて、おもしろかったです。

表2 達成目標に関する自己評価

達成目標	4	3	2	1	平均
I.	5	11	0	0	3.31
II.	7	8	1	0	3.38
III.	5	10	1	0	3.25
IV.	6	7	3	0	3.19
V.	10	6	0	0	3.63

表3 『伊勢物語』に関する自己評価

	4	3	2	1	平均
魅力の理解	9	7	0	0	3.56

- ・短時間で歌を作ることは難しいと分かった。自分の歌をつかって他人が歌物語をつくると、歌の意味が変化していて面白かった。
- ・自分の作った歌を他人が物語にすることで自分の意図とは別の形に変わった点がおもしろかった。
- ・歌をつくることも作者の考えを知る上で、良いと思ったが、その後の歌物語をつくり、配列するというのは、人よっての捉え方が全く違うことが鮮明に分かり、物語の授業をする上で、とても勉強になりました。
- ・日頃歌を作ることがあまりないので、歌を作ることは難しかった。しかし、皆の歌を読むことは、新鮮で楽しかった。また物語を作ることは、いろいろな考えを聞くことが出来、楽しかった。
- ・最初は、古典が苦手で自分には向いていないと思っていたけど、歌物語の構成を考えていく上で、頭の中で様々なストーリーを想像することができて、すごく楽しかったです。
- ・歌や歌物語を作ることの難しさ、面白さを体験することができ、伊勢物語の作られ方についてより知ることができたと思う。

本報告の「はじめに」で述べたように、「古典文学」の役割は、古典文学を題材に「広い視野で物事を考えることができる」ようにアクティブ・ラーニングの手法を活用することとした。また「広い視野で物事を考えること」は人間と、その価値観、および言葉の多様性を受容し、自分なりに思考することとした。その上で自由記述の感想を見直すと「他の人が何を考えているのか」、「人それぞれの解釈」があること、「違った視点から歌がかいしゃく」されること、他人の物語によって「歌の意味が変化」し、「自分の意図とは別の形に変わった」こと、「人よっての捉え方が全く違う」こと、また「いろいろな考えを聞くことが出来」たなどの点に触れ、しかもそれらが肯定的に捉えられている。そのような感想は人間と、その価値観の多様性に関わると考えてよいであろう。「様々なストーリーを想像すること」とは配列の作業に関する感想だと思われるが、これも言葉の多様性に触れていると考えられよう。「伊勢物語の作られ方」

への言及は、今回の取り組みが『伊勢物語』の表現行為と、その特質を理解するためであるという授業担当者の意図をうまく汲んでくれた感想である。

4. 今後の課題

今回の取り組みを振り返って、アクティブ・ラーニングが受講生の積極的な参加を促し、「学習・教育目標」の達成に貢献する手法であることは確認できた。しかし、科目の達成目標との有機的関連性については不十分だと言わざるをえない。特に達成目標2「参考書を活用し、古典文法の基礎を踏まえ、古文を現代語訳できる」、達成目標3「自ら課題を設定し、自分なりに考察できる」、達成目標4「提示された論点を整理し、ディスカッションできる」は「できなかった」という回答があった。達成目標と教育手法の見直しが必要である。

（謝辞）17名の受講生に心から感謝したい。受講生の積極的な参加によって授業担当者も『伊勢物語』の魅力を感じつつ、楽しく作業に取り組むことができた。重ねて御礼申しあげる。

（平成27年9月25日受付）

（平成27年11月25日受理）

参考文献

- (1) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」中央教育審議会、平成24年8月28日
- (2) 日本文学アクティブ・ラーニング研究会「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ 和歌を演じるワークショップ」, リポート笠間, 58, pp.5-8 (2015)